



今月の話題

- 7月9日に中間発表会を開催
- 新潟研修旅行レポート (7月1-2日)
- 国際津波シンポジウムレポート (7月1-3日)
- 防災科学技術研究所訪問 (7月14日)

研修データベース

IIEENET (地震防災技術情報ネット)

IIEE-UNESCO レクチャーノート

Eラーニング

シノプシス・データベース (修士論文概要)

Bulletin データベース

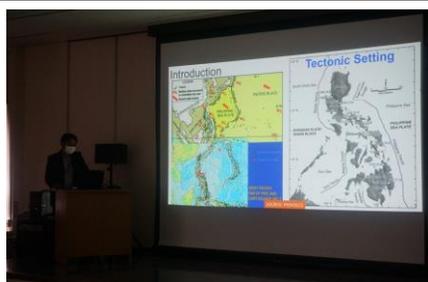
7月9日に中間発表会を開催

国際地震工学センター長 小豆畑 達哉

7月9日に個人研修の一環として中間発表会を開催しました。中間発表会では、研修生全員に個人研修成果の中間報告を求めています。また、この発表会は、研究発表の練習にもなり得るものと考えています。

発表会は、STコースは合同で、Eコースはこれとは別に行いました。コロナウイルス感染防止のため、昨年と同様に広い部屋を使用する等の対策を取りました。また、現在も母国に留まっている研修生3名は、オンラインで参加し発表を行いました。

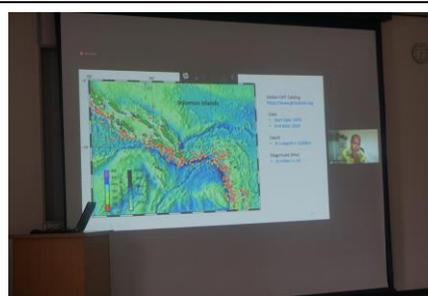
研修生には引き続き研究に精力的に取り組むとともに、これまでの努力を無駄にすることが無いよう健康面にも十分配慮してもらいたいと思います。



フィリピンのジョエルさん
地震学コース



東ティモールのジョバニオさん
地震学コース



ソロモンのカルロスさん
津波防災コース



バングラデシュのイブヌルさん
地震工学コース

地震データベース

2011年3月11日東北地方太平洋沖地震

地震情報

宇津カタログ(世界の地震被害)

地震カタログ(世界の大地震の震源メカニズム、余震分布等)

論文募集

IISEE Bulletin は、現在地震学、地震工学、津波に関する論文を募集しております。開発途上国に関するものを対象としていますが、それに限らず募集しています。

送って頂いた未発表の論文は、編集委員会と専門家による査読を行います。投稿料は無料です。

是非チャレンジして下さい。

新潟研修旅行レポート (7月1-2日)

ディ・ビダン・チャンドラ (バングラデッシュ出身、地震工学コース)



建築研究所 国際地震工学センターは1泊2日の新潟研修旅行を実施しました。参加したのは地震学と地震工学の2つのコースの研修生です。きおくみらい、木籠メモリアルパーク水没住宅、山古志支所復興交流館おらたる、アオーレ長岡など長岡市を中心に2007年新潟県中越沖地震や関連災害の被災地を訪問しました。

研修旅行中に見た長岡市の航空写真から中越沖地震で被災した地域の様子を知りました。また、地震による土砂崩れによる河道閉鎖によって水没した集落

の復興の過程が紹介された3Dドキュメンタリー映像には、大変感銘を受けました。木籠メモリアルパークでは、水没した家屋がそのまま保存されているのを見学し、その他、美しい外観とナカドマ(屋根付き広場)が特徴的なアオーレ長岡や、独特な建築物、アルパカ牧場など様々な場所を訪れました。

研修旅行を通じて、日本人は決して生きる希望を捨てない国民だと感じました。この国を様々な自然災害が繰り返し襲い、数えきれない貴重な命が奪われ、道路など生活の基盤が破壊されても、この国の人々は一致団結し努力してきたのだと実感したのです。また、そのような自然災害は人々や国土に損害を与えただけではいけないのだ、とも感じました。災害がもたらした甚大な被害から、日本人は学び、住宅や土地利用等の技術を改善していったのです。

この研修旅行は私にとって実り多き経験でした。参加できてとてもうれしく思います。世界中が新型コロナウイルスの脅威にさらされて困難な状況でも、このようなイベントの準備をしてくださった皆さんに感謝します。次期以降の研修でも、引き続きこのような研修旅行があることを願っています。



木籠メモリアルパーク



やまこし復興交流館 おらたる

ネパール・ニティアム（プータン出身、地震学コース）



長岡市への2日間の研修旅行は非常に有益で楽しいものでした。2004年の新潟県中越地震によって甚大な被害を受けた山古志村の視察に主に重点が置かれ、まず「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」から始まりました。施設には、地震によって山古志にもたらされた被害についてのドキュメンタリーや、たくさんの写真アーカイブ、救助活動の記録が保存されています。また、地震の経験を踏まえて設計された段ボール製の簡易避難場所のモデルも展示して

あります。新型コロナウイルス感染症に対するガイドラインに基づいて設計された最新の避難場所のモデルも見ることができ、タイムリーで立派な取り組みに感心しました。

2日目は、やまこし復興交流館「おらたる」、「木籠メモリアルパーク」を訪問しました。この地域は山岳地帯で、地震が引き金となって発生し、村をほぼ完全に孤立させた多くの地滑りが発生した場所です。復興交流館にある震災に関する展示からも、当時の救援・救助活動のマネジメントと手段について知ることができます。地震と地滑り両方に脆弱な国の出身である私にとって感情的な価値のある訪問でした。教育的な時間を過ごした後、旅行の最後の訪問先である油夫アルパカファームはよいリフレッシュとなりました。



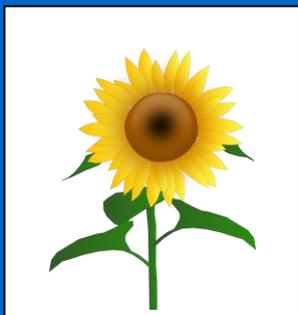
楽しむのは今です。



シティホールプラザ アオーレ長岡

国際津波シンポジウムレポート（7月1-3日）

プリド・イパラギレ・ヘローニモ（チリ出身、津波防災コース）



第30回国際津波シンポジウムは、宮城県の県庁所在地、東北地方で最大の都市、仙台で開催されました。

このシンポジウムに参加した一般的な理由は、津波予測、早期警戒警報、構造物に関する計装の相互作用、実験手法、現地調査、教育、その他諸々を直接目にするものでした。このシンポジウムの主たる目的は、様々なエネルギーのテーマの分野に関係する会員の、専門的な研究実施の高い水準を確立し維持することでした。

また、今年のシンポジウムのテーマは、2011年東日本大震災10周年の追悼と、この震災から得た教訓と経験を如何に後世に伝えるかでした。

これは、シンポジウム初日の開会式での今村文彦教授（東北大学災害科学国際研究所長・国際津波シンポジウム実行委員長）によるスピーチのテーマでもあり、佐竹健治教授（東京大学地震研究所長）による発表「2011年東北地方太平洋沖地震：不測の事態を将来の災害に生かす」でもあり、また、越村俊一教授（東北大学災害科学国際研究所）による発表「2011年東北地方太平洋沖地震津波災害からの教訓と津波に強い社会に向けた展望」でもありました。二日目は、危険とリスクの評価や新しい実験手法の発表で始まり、今回後者においては、チリのカトリカ・コンセプション大学（UCSC）土木工学科のラファエル・アランギス博士が、ポンプ駆動フロー法を用いた津波実験の新システムを紹介しています。三日目は、分析的で数値的な手法の発表で始まり、いくつかの発表で、波の伝播モデルや津波の駆け上がりの想定が話題にされました。午後は、2回目の危険とリスクの評価や新しい実験手法の発表が行われました。

南洋理工大学（シンガポール地球観測所）のコンスタンス・チュア博士の研究「港湾産業にダメージを与える波の特性」によると、津波の脆さは様々な産業へのダメージを特徴づける手法として機能し、また、これらの機能を説明する上で、浸水深は最も信頼できる危険尺度のひとつであると述べています。



(1番左) 東北大の Erick Mas 博士
(1番右) 東北大の今村文彦教授

連絡先

IISEE ニュースレターは、IISEE と卒業生の架け橋を目指しています。

ニュースレターへの報告や記事をお待ちしております。皆様の自国での活躍をお知らせ下さい。

また、皆様の同僚やお友達もこのメーリングリストに登録するようにお誘い下さい。

iiseenews@kenken.go.jp
<http://iisee.kenken.go.jp>

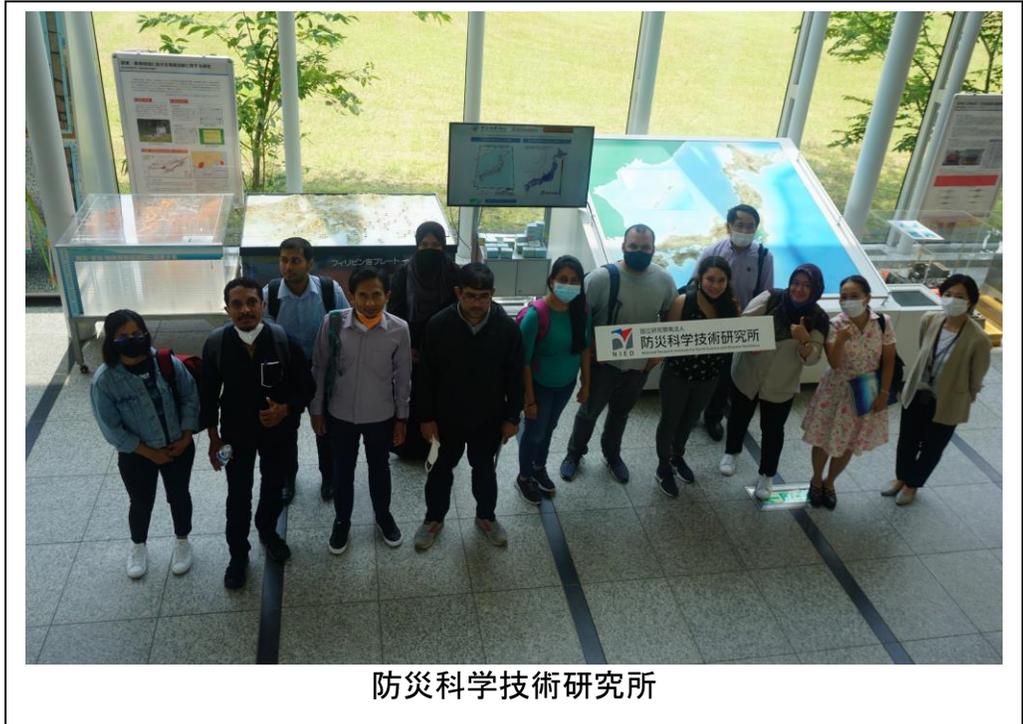
バックナンバーは
下記をご覧ください。

<http://iisee.kenken.go.jp/nldb/>

防災科学技術研究所訪問(7月14日)

国際地震工学センター 上席研究員 芝崎 文一郎

7月14日午前に、研修生12名が防災科学技術研究所を訪問しました。研修生3名は、自国からオンラインで講義に参加しました。まず初めに、防災科研の紹介動画を聴講し、次に大型耐震実験施設の見学を行いました。次にオンラインでの講義により、地震津波火山ネットワークセンターの活動の紹介がされました。陸海統合地震津波火山観測網「MOWLAS(モウラス)」などの高密地震観測網が紹介されました。また、地震減災実験研究部門により、実大三次元震動破壊実験施設(Eーディフェンス)を用いて行われた地震の衝撃に対する構造物の性能評価に関する研究成果が紹介されました。研修生は大変高い関心を示し、活発な質疑が行われました。



防災科学技術研究所